

特 集

## 札幌学院大学人文学部創立30周年 記念講演とシンポジウム

### 事業の概要と経過にかんする報告

札幌学院大学人文学部は一昨年の2007年に創立30周年を迎えました。札幌学院大学の最も早い前身は1946年に創設された札幌文化専門学院ですから、学園創設から数えると昨年で62周年、札幌短期大学時代から数えると58年、4年制大学に移行した札幌商科大学時代から数えると大学創立40周年となります。したがって、1年遅れとなりましたが、昨年の11月8日、札幌学院大学人文学部創立30周年を記念し、地域社会に貢献する事業の一環として、札幌学院大学において記念講演とシンポジウムを開催いたしました。当日のプログラムは以下の通りです。

人文学部長挨拶

第1部 記念講演（午前10時30分～12時）

演題「地球と人類の未来」

講師：石 弘之（東京農業大学教授・元東京大学大学院教授）

司会 奥谷 浩一（札幌学院大学人文学部長）

第2部 シンポジウム（午後1時30分～4時30分）

統一テーマ「家族・学校・地域の再生を考える」

パネラー1. 村瀬嘉代子（北翔大学大学院教授・大正大学名誉教授）

個別テーマ「自らも生き、周囲も生かす」

パネラー2. 才村 純（関西学院大学人間福祉学部教授）

個別テーマ「子ども虐待防止の観点から」

パネラー3. 安岡 譽（札幌学院大学人文学部教授）

個別テーマ「家族における人間の再生」

司会 松本伊智朗氏（札幌学院大学人文学部教授・総合研究所所長）

日時 11月8日（土曜日）

場所 札幌学院大学 SGU ホール（G館1階）

主催 札幌学院大学人文学部

この記念事業の宣伝ビラに記載された石弘之先生の記念講演の趣旨は以下の通りです。

「人口の増加によって食糧や資源が不足して地球が危機的状況に陥るという警告は、18世紀の人口学者マルサス以来、何回となく繰り返されてきました。21世紀に入ってこの警告が現実味を帯びてきました。止まらない人口増加、悪化をつづける地球環境、さらに資源の先行き不安からくる原油、資源、食糧の高騰が加わって、早晚破局を迎えるとする予測も各種発表されております。これは、人類が「文明」を手にしたがための必然なのか、私たちの努力で回避できるのか、考えてみたいと思います。」

同じく、この記念講演に引き続いて行われたシンポジウムの趣旨は以下の通りです。

「我が国では現在、家庭と子育てをめぐる諸問題が深刻化しつつあります。子ども虐待、家庭内暴力、いじめ、不登校、引きこもりだけでなく、子どもどうしや子どもによる親の殺害などの恐ろしい事件さえも生じています。こうした問題の背景には、核家族化・少子化・家庭の孤立などの要因に加えて、子どもと子育てをめぐる社会的・文化的環境の悪化と子育ての力の低下があると考えられます。こうした問題を解決するためには、これらの問題を生み出す原因が家庭や学校などの個別的な場面だけに求められてはならず、社会全体の問題としてとらえられなくてはなりません。このシンポジウムでは、三人のパネラーをお迎えし、これらの問題の真の原因がどこにあるのか、家庭と地域の子育て力をどうすれば向上させることができるのか、これらの問題を防止・解決するにはどのような具体的方策と新しい社会的ネットワークが必要なのかを、青少年の生育環境の再生という視点から考えます。」

次に記念講演者の講師とシンポジウムのパネラーの略歴を紹介します。

【記念講演】講師 石 弘之（東京農業大学教授，元東京大学大学院教授）

1940年東京都に生まれる。東京大学卒業後、朝日新聞社に入社。東京本社科学部次長等を経て1985年より編集委員。1994年朝日新聞社退社。1996年～2002年東京大学大学院教授。2002年～2004年駐ザンビア特命全権大使。2005年北海道大学大学院教授。2008年から東京農業大学教授。この間、ニューヨーク、ナイロビ、バンコク、プタベストなどに駐在。世界約130カ国で調査・調査活動。主な著書に『地球環境報告Ⅰ・Ⅱ』『酸性雨』岩波新書、『子どもたちのアフリカ』『森林破壊を追って』朝日新聞社、『私の地球遍歴』講談社、洋泉社＝文庫化、『地球環境「危機」報告』有斐閣がある。

## 【シンポジウム】

パネラー 村瀬嘉代子（北翔大学大学院教授，大正大学名誉教授）

1959年奈良女子大学文学部心理学科卒業。1959年～1965年家庭裁判所調査官（補），1962年～1963年カリフォルニア大学大学院バークレイ校留学を経て，最高裁家庭裁判所調査官研修所研究員。1967年大正大学講師，助教授を経て1984年から教授。現在同大学名誉教授。2007年から日本臨床心理士会会長。2008年から北翔大学大学院教授。児童・青年期の人々と家族の心理臨床，心身障害児，養護施設児童，聴覚障害者の心理的援助に携わる。主な著書に『こどもと大人の心の架け橋』金剛出版（1995年），『よみがえる親と子—不登校児と共に—』岩波書店（1996年），共著『心理臨床の基本』金剛出版（2000年），『聴覚障害者への統合的アプローチ』日本評論社（2005年）がある。

パネラー 才村 純（関西学院大学人間福祉学部教授，

日本子ども家庭総合研究所ソーシャルワーク研究担当部長）

大阪市立大学文学部心理学科卒業後，大阪府に入庁。大阪府児童相談所（現子ども家庭センター）児童福祉司を14年間務める。大阪府福祉部福祉総務課監査指導室主査，大阪府福祉部障害福祉課地域生活係長，大阪府福祉部福祉政策課主幹，厚生省児童家庭局児童福祉専門官を歴任。日本子ども家庭総合研究所ソーシャルワーク研究担当部長を経て，2008年から現職。主な著書に共著『児童虐待とソーシャルワーク実践』ミネルヴァ書房（2001年），編著『子ども虐待の予防とケアのすべて』第一法規（2003年），『ほくをたすけて～子どもを虐待から守るために』中央法規（2004年），『子ども虐待ソーシャルワーク論—制度と実践への考察』有斐閣（2005年）などがある。

パネラー 安岡 譽（札幌学院大学人文学部教授）

1973年札幌医科大学大学院医学研究科神経精神医学専攻博士課程修了。1973年札幌医科大学医学部神経精神医学講座助手，1974年同講師。1979年福岡大学医学部精神医学講座講師。1989年札幌佐藤病院副院長。2003年札幌学院大学人文学部教授。2006年から2年間，札幌学院大学大学院臨床心理学研究科長。主な著書に共著『精神分析を学ぶ』有斐閣選書（1981），共著『青年期の精神病理と治療』金剛出版（1983年），共著『看護テキスト』広川書店（1990），共著『シリーズ精神科症例集』中山書店（1994年），共著『精神分析辞典』岩崎学術出版社（2002年）がある。

この記念事業の前日から大荒れの天気となり，当日も北海道は全道的に冷たい強風が吹きさぶ有様でした。当日遠方から到着されるパネラーの先生もおられてとても心配しましたが，

無事時間通りに記念事業を開始し、成功裡に終了することができました。記念講演の参加者はおよそ250名、シンポジウムの参加者はおよそ150名で、悪天候であったことを考慮すると、まずまずの数字であったと思います。石先生の記念講演は、鳥インフルエンザの脅威と食糧問題のふたつを取り上げ、データを駆使しながらわれわれに警鐘を鳴らす感銘深いお話でした。シンポジウムもまた、さまざまな困難をかかえる現代日本の子育ての状況と問題点、児童虐待の防止の原因と対策、そして家族の再生の方向を指し示すきわめて有意義なものでした。フロアからも鋭い質問と意見があり、それなりの盛り上がりを見せたシンポジウムであったと思います。参加者のアンケートから見ても、とても勉強になった、感銘深かった、これからの家庭生活で役に立つヒントをいろいろと得ることが出来たという肯定的な評価がほとんどでした。主催者側としてもとてもやりがいのあった記念事業であったと感じています。

大変お忙しいなか、しかも遠方からわざわざ本学までお越しいただき、記念講演の演者とシンポジウムのパネラーとして教えと示唆に富むお話をしてくださった諸先生に心からお礼申し上げますとともに、悪天候について私どもの記念事業にご参加いただき、この事業の成功にご協力いただきましたすべての市民・教職員・学生の皆様に心より感謝を申し上げる次第です。

人文学部長 奥谷 浩一